
消へ往ク者 進ムベキ者

妙吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

消へ往く者 進ムベキ者

【Nコード】

N3225P

【作者名】

妙吉

【あらすじ】

慶応三年四月七日。桜咲き誇る長州に一人の男がとある庵に訪れた。

（前書き）

この作品は史実を元にしたフィクションです。原田ルートのネタバレ含みます。

この春空を閉じ込めたような、深い青の髪を高く結わえた男が小さな庵を見上げる。

庭先に植えられた枝は空に向かって伸び、薄桃色の花は咲き誇る。
（ここでいいのか……）と不安げな表情で庵の引き戸を見つめている。

この男不知火匡はここに住まう庵主に会いに来たのだが、人気（ひとけ）がない程ひっそりとたたずんでいるので、入りにくい。

（留守なのか……？）

試しにおいと呼び掛けたが返事もない。

（……参ったな）

不知火は目を細めて焦りを見せる。

何故なら長州にあまり長居できない。

京から長州までの陸路の道のりは鬼でも寝ないで数十日掛かる距離だ。

一か月前風間千景がまた雪村千鶴^{彼女}を攫うための策を練っている最中に京を発った。

もしその策に乗り遅れたら、待っているのは風間の嫌味だ。

「帰るか……」仕方がないそう諦めて、庵から立ち退こうとした時、一人の女と鉢合わせした。透き通った黒いどんぐり眼をせわしなく動かし、目を伏せてこちらの様子を伺っているように感じる。

暫し無言が続き、不知火は基地を開こうとするなり女が言いたかった事を口にする。

「……あんさん誰やねえ？」

「俺は不知火匡だ、てめエこそ誰だ？」

「うち？　うちはうの」

強張っていた女の顔が綻び、旦那様に何かようかえ？と尋ねてき

たので、不知火は頷き、留守なのかと尋ねたところ。うのは淡く悲しみを帯びた表情で答えた。

「うちは今着いたばかりどす」

「そうか」そう返して今度こそ立ち退こうとしたが、うのの俯いた表情が気になって仕方がなかったので耐えきれず。

「あんたさ、どうしてそんな顔してんだ？」と訊いた。

うのはこちらを向いて。

「うちはもう旦那様の世話ができへんのや、うちが邪魔やから」その答えを聞いて不知火は顔をしかめる。

「そんな事ねえ、お前あいつの世話をしたいからここに来たんだろ」

だが、うのは首を振る。

「気持ちを抑え込むんじゃねえ、後悔するぞ」それつきり俯いたまま黙り込みはつきりしないうのに少し苛立ったが、ようやく唇が開き声も震わせながら答えた。

「あかんのや、だつて旦那様には…」

「あら？ おうのに……そちらは初めて会う人ね、こんにちわ」うのが言いかけた途端風呂敷を持った女が立っていた。

「は…？」不知火は突然彼女の登場に豆鉄砲を食らったハトのような表情を浮かべる。

彼女に見惚れた訳ではない。まさかこの女が庵主なのかと一瞬疑ってしまったのだ。

「初対面の人に」は…？」はないわね。失礼ね」

「てめえエ…まさか、高杉なのか？」

今度は彼女が黒真珠の目を丸くして、頭の中を整理し状況を掴み、品良く笑う。

「ああ、私は晋作様の夫、雅子で御座います。そして彼女は夫の妾なんですって」

”つて”という語尾が引つ掛かる不知火は聞いたら恐ろしい事に

なるだろうと。

「あいつはいるか？」そう言って聞かぬようにした。

「晋作様ならここ七日間寝たきりです」

「寝たきり…そんなに悪くなってるのか」

「ええ、咳も喀血も一層酷くなるばかり…奇兵隊の皆様が労咳に効くと言われるモノを食べさせていますが…一向によくならないのです」

雅子の言葉に彼の病が悪化している事がこの場でよく分かる。

「どうする？ せつかく来たんだし会いに行きます？」

「……案内頼む」

「分かったわ、こちらへ」

雅子は陽溜まりのような微笑を浮かべて庵へと向かう。

「ほな、うちはこれで」

うのは様子をその見て頭を下げ、その場から離れた。

「おう、またな」

不知火は小さくなっていく寂しそうなうのの背を見送った。

「ここが晋作様の部屋です…私は昼餉ひるめしの用意するので
そう雅子は絹のように髪をなびかせ、勝手場に続く部屋へと向かった。

廊下が軋む音が響く程静かだ。本当に人がいないように感じさせる。

不知火は何故か緊張し唾を飲み込み覚悟を決める否や、一言かけて襖を開けた。

その瞬間、春風が髪を揺らす、薄桃の花びらが質素な部屋を彩るかのように舞う。

その先に居たのは庵主高杉晋作。
布団の上で寝転び、眉を寄せて古ぼけた文らしき物を読んでいた。

「よお高杉久しぶりだな」
不知火はとりあえず高杉に歩み寄りながらいつもの通りに接した。高杉はようやく気づいたのか、不知火に視線を向け微笑を浮かべた。

頬は痩け、肌は白い寝巻きと見分けがつかないほど白く元々細身だったが、さらに痩せて皮と骨しかない。
見てるだけでも痛々しい姿だった。

「すまん、これ読んじよったから気づかんかった」
手紙を畳んで隣にあった文机に置く。

「思った程元気だな」
「なあに今日は体の調子がええから、久しぶりに外の空気を吸おうと思ったに……まあ取り合えずそこに立っておらんで座れ」
高杉はそう返してきたので不知火はその場でゆっくりと座る。

「まさか手前が来るとは思わなかったな」
「悪かったな。奇兵隊の奴がてめえがブツ倒れたと聞いてすっ飛んで来ちまった」

不知火は拗ねてどうしてここに來たのか理由を話す。

そう奇兵隊に羅刹を導入させるかどうか京で軍議に出席した時、伊藤俊輔という男がそれを知らせたので軍議は急遽中止し、この議題は流れてしまった。

いや流れてもよかったかも知れない。

「いつもなら、人間風情にふりまわされねえ」とか言つて、来ないかと予想しちよつたが外れたのう」

それでも嬉しいのか高杉は照れ隠しに茶化して来る。

「確かにな。だが、お前はオレが認めた…いや認めさせた初めての人間だからよお」

真顔で素直にそう答えた不知火は高杉が笑い堪えているのを見て

「おい、なんで笑つてんだ」

「いやー…すまんすまん、ついこのう」

クツクツと笑いながら高杉は涙を拭う。

「もしてめエが病人じゃなかったら、今頃お前を殴つてたぜ」

不知火は顔をしかめ褐色の拳を掲げて高杉に見せる。

「悪い、手前がそんな事言ふんとは思つちよらんかったけに」

「てめエな…オレの事どう思つてんだ」

「さあなそれは手前で考えろ」

高杉は立ち上がると、ふらついた足元で三味線を取りに行く。

その間に不知火は開けられた障子の景色を眺める、薄桃の世界が広がっており空は清々しく澄みきっていた。

色とりどりの花々が庭を彩り、ひよどりが枝に止まり鳴く。ここだけ平定な世界を閉じ込めたような気がした。

俗世を離れた庵は、今の乱れた世を感じられぬ程穏和な世界だ。

「…なあ高杉」

「ん？」

「てめエはこれからどうするつもりだ」

「何言つちよるんじや不知火、先の短い男に何聞いちよる？」

「だからこそ聞きてえ…」

不知火は紅い双眸を光らせ三味線の調律をし始めた高杉を見据える。

「…どうするも何も、俺は明日でも死ぬ人間じゃ、遠く霞んで煌めいちよる光を掴むより隣にある小（こ）まい光を掴んだ方が俺はええ」

そう言つて高杉は鉢を動かす。弱々しい音色を奏で始めた。

高杉の微笑が今にも消えそうなぐらい儚げだ。

「…何弱気になつてんだよ、おまえらしくねえ」

眉を寄せ不知火は呟く。そう目の前で三味線を弾く高杉は不知火匡が知っている高杉晋作ではない。

高圧的で自尊心が高く負けず嫌いだが、情に篤く友やこの国、藩、家族を大切に思つ心を持った人間。それが高杉晋作だ。

「俺は別に弱気になつちよらん」

「てめえが血泥吐いてやってきた“仕上げ”の目前にして死ぬのは悔しいと思わねえのか」

三味線の音色が止まり春風がまた吹き荒れる。

「少しだけ悔しいが、俺はあいつらを信じちよる。あいつらならやれるさ」 つり上がった高杉の黒い双貌は鋭く、不知火を睨んでいるようにも見えた。

「何故、そう言い切れんだ」

人間嫌いの不知火は高杉の発言の意がいまいち分からなかった。

「それはのう…俺の同じ志を受け継ぐ同志がい……………」

高杉がそう言いかけるが背中を丸め苦しそうに咳き込んだ。
同時に三味線の鉢が落ちる。

「おい高杉?! しつかりしろ!!」

不知火は跳ね上がったように立ち上がり、側に駆けつけた。
激しく咳き込み、苦痛な表情を浮かべる高杉の背を擦る不知火。

喀血が始まったのだ。

高杉の寝巻はぐつしよりと濡れ、ぱたぱたと床には汗が混じった
赤い滴が垂れる。咳きは一層激しくなってきた。むせるような血
の臭いが鼻孔を刺激した。

「寝ろ! 取り合えず寝やがれ!」

不知火は慌てて、膝まついた高杉を支えて布団に寝かせる。

「……………」

不知火は光さえない目をした高杉を心配そうに見据える。

熱にうなされてうわ言をぶつぶつと呟く。

「…………身はた…とひ…武蔵…の野辺に朽…ちぬ…とも留…置か…
まし大和魂…」

「……………!!」

不知火は目を見開いた。

いつも読み上げる高杉の師の辞世の句が、先程の答えと重なり重
く頭に響いた。

布団に寝かせ、労咳の緊急処置など知らぬ不知火はあたふたとし
始めて取りあえず備えていた桶が水と手ぬぐいがあったので、絞つ
てそれを額に置く。

三味線は適当な場所で片づけると、咳き込む高杉の側まで寄り座
る。

布団で苦しむ高杉を見ると、死なせてはいけないという感情
がぶつぶつと芽生え始める。

知らぬ間に不知火の手は懷へ伸ばし、透明の入れ物を取り出して波立つ赤い液体を眺めていた。

（労咳は治らねえが…せめて幕府が倒れたところを見せれるかも知れねえ）

羅刹にしてしまえば病の進行を遅らせるかも知れないが、例の発作で苦しむ事になる。これは賭けだ。

そう不知火が険しい表情で葛藤している所。高杉の布団を握りしめて血を吐いてまた呟く。

「…松陰先…生…俺ア…大業…を成し遂…げ…たまし…た」
「……」

どこか満足そうな表情浮かべる高杉を見た不知火は黙って瓶を懷にしまった。

翌日。

泊まっていた不知火は、また高杉の部屋に訪れた。
今度は世話を焼く雅子が隣にいた。

「咳収まったか？」

あれから高杉は一日中熱にうなされ咳に苦しんでいた。

「手前のお陰じゃ手前が雅子呼んじよらなかったら俺は死んでも知れん」

高杉は苦笑した。

「全くだな、つかよお障子開けっ放しだったから酷くなったんじやねえ？」

「ああ、そうかも知れん」

二人は顔を合わせお互いに嘔き出した。

「いいえあの時ですわ晋作様、あの時から酷くなったと思います」

はたきを止め雅子は頬を膨らませて口を挟む。

「なんじゃ、まだ根に持ちよったんか」

「ええ、忘れられません」

あの美しく慎ましい雅子を機嫌斜めにする出来事が思いつかなかった不知火は、何の事だかさっぱり分からなかった。

「あ、そうじゃ不知火手前に渡てえもんがあつた」

「オレに…？」

何か思い出したような高杉は雅子に耳打ちをして効いた雅子は不知火の視界から消えた。

「何やらかしたんだ」

「何が？」

「さっきの」

「ああ、あの時か…大分前俺は雅子と一緒に色街にいったんじゃ」

「おいおい…まずいんじゃねえのか…それ」

同時に成程と雅子が不機嫌になるのも無理はないと不知火は内心頷いた。

「まずいか？俺は雅子を楽しませる為連れて来たんじゃ」

「……」

「そしたら雅子が偉く不機嫌になって、”もういいです”と言そのまま俺を置いていったんじゃ。分かったか？」

「ああ、それだけじゃなくて、てめえ女に関して鈍感って事もな」
「？」

自覚ねエのかよいつと不知火は呆れたようにため息を吐ききよ
とんとする高杉を見た。

「晋作様持つてきましたわ」

襖の向こう側から雅子透った声が聞こえた。

「おう入れ」

高杉の一言で襖が開かれる、雅子が手にしたものを見て不知火は

驚愕の表情を浮かべた。

「お前これ…」

雅子が手にしていたものは、鈍く光を放つ拳銃だった。

「ああ、九州逃亡から長伐ん時に護身用にう使ちよったものじゃ」

「いいのか貰っても」

不知火はなんだか申し訳なさそうない気持ちでいつぱいだった。

「俺が持つちよつても意味がねえ、もし幕府が倒れたら次の政權を巡って大戦が起る。そんな時に手前に使つて欲しいんじゃ」

その方がコイツも喜ぶじやろうと高杉は豪快に笑う。

「ありがたく使わせてもらうぜ」

そう不知火は立ちあがって、銃を腰に下げて、部屋を立ち去ろうとする。

「もう行くんか？」

高杉の声が背から投げかけた。

「ああ。早くいかねえと…あいつがうるせえからな」

「そうか、じゃあな不知火達者でな」

「ああ」

一言だけ別れの挨拶を交わして、不知火は襖を閉じる。

部屋から離れ玄關に向かっている途中、小さな咳き込む声が聞こえた。

そして高杉からもらった拳銃を見つめながら、この先の未来を憂いてこの庵を發った。

そしてその七日後、高杉は夜宴を一人楽しみながら人生の幕を閉じた。

文机に置かれた点々と赤い斑点が染み込んだ古るぼけた文にはある一文が添えられている。

大業の見込みあらばいつでも生くべし
不朽の見込みあらばいつでも死すべし

終

次の頁からおまけだぞ

「晋作様持つてきましたわ」

襖の向こう側から雅子透った声が聞こえた。

「おう入れ」

高杉の一言で襖が開かれる、雅子が手にしたものを見て不知火は
驚愕の表情を浮かべた。

「お前これ…」

雅子が手にしていたものは、『豊玉句集』と書かれた句集本だっ
た。

「ああ、京に行った時ある男が路上で配った代物じゃ」

「オイオイ、貰っていいのかそんなの」

「最初は怪しかったが男に押されて貰ったんじゃ。目を通してみ
たが…一言で言えば豊玉って奴は素直な人物だと分かる句集じゃ」

「へえ…」

「兎に角読んだら分かる」

「分かった、京に着いたオレ読むわ」

終われ

（後書き）

参考資料

敬称略

「晋作、蒼き烈日」 秋山香乃 著

「ウィキペディア」

「薄桜鬼 原田ルーツ」

最後まで読んでいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3225p/>

消へ往ク者 進ムベキ者

2010年12月5日22時24分発行